

紹介

本庄総子著

『疫病の古代史』

——天災・人災・そして——

本書は、古代日本における疫病について、単なる天災ではなく人間社会と密接に関わり合う「人災」としての側面を捉えるものである。歴史の変化を疫病で説明するいわゆる「疫病史観」を克服することをねらいとし、著者の元来の専門である行財政史の基本史料である帳簿や法令などの分析を行い、疫病と人間社会は相互に歴史的影響を被りながら変化するという見通しのもとで、疫病がいかに発生し、対処され、変化していったのかを分析することで古代の日本社会を探究する。

紹介

「疫病へのまなざし」と二つの大疫病」では、古代における疫病という概念について確認し、古代史上の大疫病の特異性と共通点を示す。史料から疫病を観察するが、記録された疫病は発生が検知され、何らかの対策が講じられたものであり、実態の一部

に過ぎない。また、疫病報告制度の衰退や六国史から貴族の日記へと史料の残り方が変化することで、浮かび上がる疫病の姿も異なることを述べた上で疫病の動態を追う。二つの大疫病とは、奈良時代の天平の疫病と平安時代中期の正暦・長徳の疫病である。前者は、藤原四兄弟に代表される政權中枢を直撃したことで知られる。両者の共通点として、大宰府から伝播したと認識されていたこと、特に第二波が甚大な被害をもたらしたことがあげられる。

「古代疫病流行の仕組み」では、疫病に関して人口、農業、信仰という面から論じる。京や畿内で疫病が流行する理由には人口集中がある。居住者に加え、地方から税を運ぶ運脚や京の労働力となった役夫という一時滞在者は、食料不足や帰国の困難さ、発症時の看病がないことなどが影響し、疫病による死亡リスクが高くなっていた。運脚たちは検収を待つ間に京下の役と呼ばれる日雇い労働に従事しており、食料確保の手段となっていたのではないかと指摘する。また、飢餓状態の広がりや疫病には相関があると述べ、疫病発生の季節性を論じる。帳簿や疫病対策の史料から夏（当時の暦で

四〜六月）にリスクが高まっていたことを示し、コメの生産と連関していたことを明らかにする。日本古代におけるコメは食料としてだけでなく経済や人民支配の体制にも関与しており、古代社会は稲作に依存していた。稲作には多くの労働力が必要としていたため、九世紀前葉から中葉にかけての疫死者数と耕作不能地である不堪佃田の過大報告の同時進行は、疫病による労働力の減少が産業構造と関連して疫病の被害をさらに深刻化させたと述べる。さらに、深刻な疫病を目の当たりにした当時の人々は、疫病忌避の感情を抱き、感染を避けるために病人との空間共有を回避し、看護放棄という選択がなされることもあった。多様な階層が集住する京では、疫病への対応は身分構造とも関わり、身分の低い人々の感染状況が貴族たちにとって、自身の感染リスクの指標になり得た。

疫病忌避に関連し、日本古代の衛生観念を示す事象の一つとして「狭義の穢れ」があげられており、紹介者自身の関心からこの点について述べる。「狭義の穢れ」とは、十世紀に成立した律令の施行細則をまとめた『延喜式』で集大成されるもので、祭祀

にあたつて人間や動物の出産・死など避ける考え方である。病人そのものが「穢れ」となることはないが、病人が亡くなると死穢が発生し、回避のために空間共有を避けなければならない。本書では、感染忌避のパターンである空間共有の忌避を穢れとの共通項とし、疫病体験による空間共有忌避の規範が穢れ忌避の作法に投影されていると推論する。この推論は穢れ研究に関連して興味深い。広義の「穢れ」という觀念に含まれる不浄観は、さまざまな時代や地域に見られ、歴史学や民俗学、文化人類学などで研究の対象となっている。「穢れ」という言葉や概念に含まれるものが多様であるため、対象が曖昧化しやすいのだが、疫病と対峙した人々と関連させることで、日本古代特有の「狭義の穢れ」について考える一つの視点になるのではないだろうか。「疫病の時代相と人々の向き合い方」では、疫病の歴史的展開を具体的に論じる。八世紀には、幾度かの疫病流行が見られるが、人口減少への危機感は見られず、疫病と飢饉の相互関係がありながらも数年以内に復興していたと推定する。しかし、九世紀に入ると、平安京造営による人々の疲弊

に加え不作や疫病が続いたことで復興の遅延が注目され始め、復興が遅れている中で次の疫病が発生し、さらに深刻化するという負の連鎖を断ち切れず、「疫病頻発の時代」を迎えた。九世紀半ば以降は、疫病報告の制度自体が実態を失うため、疫病頻発の時代の終わりを見極めることは難しいとする。十世紀末には正暦・長徳の疫病など再び疫病の危機が高まるが、この背景には温暖化による環境変化を想定する。このような疫病に対して取られた対策として賑給という食料の支給があったが、医療や薬の提供は貴族に限られた。また、疫病と密接に関連する農業対策としての勸農、疫病の経路と考えられた道路での祭祀等が行われた。このような国家レベルの疫病対策だけでなく、個人レベルでは疫病患者との接触自粛が行われていた。前述した看護放棄に加え、貴族の日記に見える見舞いの遠慮、疫病流行時の宴会・外出の自粛を例にあげる。巻末では人災としての疫病を人間の過失や不作という意味ではなく、日本古代の社会のあり方や理想追求との矛盾として現れたものであると結論づける。九世紀以降、地方の自律性が許容されるようになる変化

は律令国家の「崩壊」とも「完成」とも評価される。しかし、著者はこの変化を中央政府が追求した人口増加と農地拡大に立ちはだかった疫病の頻発という現実への適応を模索したものと評価する。

新型コロナウイルス感染症を経験した現在、疫病というテーマはより身近に感じられるようになった。今回の感染症が社会に与えた影響は世界的に大きなものであったが、国や地域ごとに対策や感染状況はさまざまであった。日本では、本書で指摘された農業や飢饉との関連は古代と共通しなかったが、感染の波があったことや空間共有を避けることなどは古代との共通点としてあげられよう。著者が巻末で述べるように、疫病と人間社会の関係は、他時代や他地域に敷衍できるもの、それぞれに特有なものがある。新型コロナウイルス感染症をはじめとして、疫病や感染症と人類について考える際に、一つの例となる古代の日本社会の様相をまとめた有益な一冊である。

(四六判 二〇五頁 二〇二三年八月)

吉川弘文館 一七〇〇円＋税

(飯田なつみ 京都大学大学院)

文学研究科修士課程